

# 講演

畑田重夫さん（国際政治学者）

## 「蟹工船と日本国憲法」を聞く

—私たちは今どう生きるか—

河合靖久

新潟県平和委員会総会が長岡市で7月6日に開かれ、著名な国際政治学者・畑田重夫さんが記念講演をなさいました。やや時が経ちましたが、私なりに要約して紹介します。文責は河合にあります。



講演する畑田重夫さん

### 日本国憲法と私

「大日本帝国憲法」下の学徒出陣で、同期の学友の多くを失い、数少ない生存者の一人である私も軍隊での

手術の後遺症で、今も悩まされ続けています。

戦争が終わり、新憲法を初めてみた時の新鮮な感動は、今も忘れません。結婚の際、憲法二四条の男女平等の実践として二人のジャンケン勝負で、妻の「畑田」姓に決めました。焼け野原の東京で二三歳でした。

それから今日まで「困った場合は憲法に聞け」、「迷った時は憲法に聞え」を信条として実践してきました。

日本国憲法は、ルールブックであると同時に我々の未来を指し示す水先案内であり、羅針盤ともいえます。今日に至るまで一貫して平和を守る運動に身を置き、理論と実践の統一を求め生きてきました。この戦後の私の生き様は、学生時代の深刻な戦争体験が原点にあります。

現実の問題として、総理大臣以下、選挙で選ばれた者は、すべて公務員ですから、憲法九九条により憲法を守り、従う義務がある。平和条項の九条と合わせて「九が三つで、スリーサイン」で、とても大切です。

憲法を空気や水のように身近に置いて、自分の体内に取り込み、日常生活に生かす努力の大切さを、これからいっそう声を大に伝えていきたいと決意しています。

私は、九月で八五歳になりますが、認知症になった妻を看取りました。今朝の新聞記事に老人が老人を介護する「老々」介護から、やがては、認知症者が認知症者を介護する「認々」介護になると出ていました。

しかし、日本国憲法により六〇年間の平和と安全な世の中があったからこそ、勤勉な国民性が発揮され、世界第二位の経済大国となれたのです。社会や政治を正しく見る科学的な視点が、日常生活の中に必要です。

### 毎日のくらしの中に真実を見抜く

連日のニュースのトップに事件・事故や犯罪が、報道される日本は、世界から見ても異常なのです。

親が子どもを子どもが親を、兄弟が殺す、誰でもよかったなどの殺人が後を絶たない。

さらに、絶えない自殺の増加は、サミット参加国の中でも第一位にランクされています。世界でも有名で、イギリスの雑誌の特集にもなっています。あまりにも異常が続くと、それを異常と感じなくなる恐ろしさもあります。

かつては、日本は経済大国だ、資源もない小さな国で、何で国民総生産が世界二位なのか…不思議がられ、

羨ましがられてもいました。

ところが、しばらく前から日本は、「同情と軽蔑」の混ざった目で見られるようになってきました。今はさらにその異常さが進んでいます。

あの五年五ヶ月続いた小泉「自・公」政権の新自由主義的な経済政策が、日本の労働環境を破壊したのです。

小泉・竹中両人の罪はとて大きいのです。

また、それらのたくらみを見抜く国民の力も求められているといえます。

小泉・竹中の二人が強引に進めた新自由主義経済政策のキーワードは、「小さな政府」「民営化・官から民へ」「規制緩和」「市場原理」であり、それとセットで「成果主義」と「自己責任論」が強調されたものでした。

だから、恋愛、結婚、受験、就職、子育てまでが「失敗は、自己責任」となってしまう、格差を生み、生きる自信を喪失させています。

若者を中心に年配者まで、生きづらさの本当の原因を見つけれず、正しく社会に目が向かないために自殺する人が外国と比べても断然多いのです。

「自己責任」論の結果として、自殺原因のトップが鬱病になっていることでも証明されています。

どこに本当の問題があるのかをしつかりつかんで、毎日のくらしのなかで、「歴史に学び、現実を見つめ、未来を展望する」ことの大切さを強調したい。

### 「蟹工船ブーム」と現代日本の雇用と労働の実態

小林多喜二の『蟹工船』が、よく売れ、読まれています。若者の多くが歴史に学ぼうとしている事は、喜ばしく歓迎すべきことです。

私は、これまでも歴史に学び現実を見つめ未来を切り開こうと主張してきました。目先のこと、だけにとらわれていると、必ず流されてしまいます。

「日本の青空」という治安維持法を扱った映画も、全国で上映され、あんなに敵しい時代があったことを初めて知ったという若者が多くいます。治安維持法の実態を、映画で知った若者も多かつたはずですが。

小林多喜二の『蟹工船』も単なるブームではなく、現実の労働環境の厳しさが、若者を引き寄せています。多喜二が生きた20世紀初頭の労働と雇用が現在の日本の実態と酷似しているからです。

人間が「モノ」並に扱われている現実と小説とが、あまりにも酷似しており若者への接点となっています。

蟹工船の周旋屋が、現在の派遣会社です。あの頃の蟹工船の漁夫たちの働く状況と現代の派遣やパート労働との共通点が共感を呼んでいるのです。あの頃の先のない奴隷労働の状況と、人間としての希望のない現在の若者との共通点がある種のブームを呼んで若者に読み継がれているのです。それだけ迫り詰めてられている若者が多くなっている証拠でもあります。

九〇年代の労働法制の変容は激しく、九三年の経済改革研究会(中間報告)の平岩レポートは、「経済規制の原則自由化」と「社会的規制の最小化」を標榜し、九七年には、男女雇用機会均等法、労基法の女性保護規定の改定、九八年労基法改正へと着々と労働条件の劣悪化を進めてきました。さらに仕上げとして、九九年労働者派遣法、職安法の改正、〇三年の労基法、派遣法改正と「規制緩和」されて、これまで限定されていた派遣労働がほとんど全ての仕事に自由化され、有料職業紹介の自由化が法律として認められてしまいました。結果として、使用者の都合で「いつでも雇え・解雇できる」システムが法律として制定されたのです。

だからこそ、歴史に学び、現実を見つめ、未来を展望する学習の機会を大切にしたいし、労働組合がそれ

にみあう活動をするように期待しているのです。

## 世界の流れと日本の現状

9・11以降のアメリカのアフガン・イラク戦争は完全に失敗し、テロはかえって分散してしまいました。

軍事力では何も解決できないことがはつきりしたのです。ブッシュ大統領は裸の王様です。世界の軍事同盟は劣化し、色あせたのが現在の世界なのです。

今は、確実に「平和の力」が世界中にひろがり、強化されています。横須賀の原子力空母・母港化も、一九七四年に「向こう三年間だけで、原子力空母は来ません」というアメリカとの約束でした。ところが、アメリカは約束を破っても平気です。しかも戦後の日米関係は、密約だらけなのです。

原子炉・原子力発電所を、今までは不可能な首都圏に設置しようなものです。しかも始末に悪いことに、これらの空母や潜水艦の原子力艦船は、軍事機密を口実に、放射能をまき散らしても平気なのです。

アメリカにとって日本の魅力は、

- ① 朝鮮・中国・ロシアへの地理的優位性
- ② 科学・工業水準の高さ

③ 戦争に駆り出せる人材(若者)

と述べています。

そのために戦後のあらゆる機会を利用して占領政策を続けてきたといえます。

日本の改憲勢力と護憲勢力のせめぎあいのなかで、昨年の参院選の自民党の歴史的惨敗や安倍内閣等の崩壊に見られる政局は、改憲派には深刻な後退なのです。

中曽根元首相の言う改憲のための「我々のコース」はますます劣勢になったといえるでしょう。

日本国の政府は、憲法を空洞化したり、曲げて解釈したりしてきたので、今日の混乱した日本が生まれてしまいました。

私たちはこれまでも6・9行動などを積み重ねて、様々なねばり強い運動を持続してきたことは重要です。

4・17の名古屋高裁の「イラク派兵は憲法違反の判決」は画期的で、その意義は大きいのです。憲法を守ろうとする世論のたかまりがあります。

「9条の会」などのひろがりやと発展、改憲勢力を上回る運動が大切です。

しかし、巻き返しを図る新憲法制定議員連盟・安保法制懇等は軽視できません。

子どもたちを狙い、「戦争する日本」へのアメリカや自衛隊の策動は続いています。

相次ぐ不祥事の発生が止まらない自衛隊やアメリカ軍は、子どもたちを取り込むために催し等を口実に基地に招待し、戦車や軍艦に乗せたり、兵器を扱わせたり、物や漫画を配ったりして子どもらを勧誘しています。公共の場への進出も狙っています。

私たちのねばり強い運動の積み重ねや、たゆまず警戒心を持ち続けることが大事です。

むすび・質問に答えて

「世界に誇れる日本国憲法」どおりの国―日本を実現するために、ルールブックとして、羅針盤としての憲法を深く学び実践することが重要です。

「こころざしは、たかく。しせいはい、ひくく(謙虚に)」と、草の根の地道な活動の積み重ね、思想・信条・世代を超えて手を結び合う、平和活動が大切です。

質問、日本ではなぜ国民が温和しいのか？

答、韓国でもヨーロッパ諸国でも、若者や労働組合が元気です。日本は、労働組合の力が低下してきてい

ます。

『蟹工船』が読まれている反面、若い人たちが日本の近現代史をあまりにも知らないのです。

治安維持法や、広島・長崎に原爆を落とした国がアメリカと知らない若者が増えています。

したがって、懇切丁寧に語り学び合い、創意工夫ある若者の力を生かした取り組みが必要です。

重厚な歴史認識で、明るい未来を展望できる、憲法などの学習は、極めて重要です。

学習の方法や内容、運動の進め方、若者の感性を生かした集会の宣伝、各地の若者参加の具体例に学び、経験を広めていくことが求められています。

(かわい やすひさ・所貝)



## 田母神俊雄・前航空幕僚長が提起したのは

「侵略国家は濡れ衣」という懸賞論文で時の人になった、田母神前空幕僚長は11月11日、国会での参考人質疑を自説宣伝の格好の場にしたかのようだ。

16日、著名なテレビ番組で自衛隊の高官や中級幹部出身で大学教授、准教授の論者がそれを擁護した。田母神氏の歴史認識は、自衛隊員の多くが共有しており、憲法で自衛隊を明記するなど適切な対応をしないと隊員の士気は上がらないと強調した。

二〇歳代の自衛隊員は、天安門事件の頃に生まれて近現代史は何も習ってこない、とも彼らは言った。これは自衛隊員だけのことではない。多くの若者が、恐ろしいほどに歴史認識が弱い。学校の教科書よりも、こばやしよしのりの劇画に影響されているといえる。

この問題を真剣に研究し、広く国民的論議を起す時機かと思う。「9条の会」を支持する小池清彦加茂市長は、「3年あれば、本当にかつての軍国主義日本に戻ってしまう」と断言し、警告された(『朝日』14日付、県内版)。60年に自衛隊に入り90年代に防衛研究所長、教育訓練局長など歴任された小池氏の言は重い。

(吉)